

「日本医師会 赤ひげ大賞」について

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催となり「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、ジャパンワクチン株式会社の特別協賛、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援の下、平成24年に創設したものである。

【対象者】

病を診るだけではなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）。

【推薦方法】

各都道府県医師会会長が推薦（原則1名以上2名以内）

選考委員

| | |
|-------|-----------------------------|
| 羽毛田信吾 | (昭和館館長、宮内庁参与) |
| 向井 千秋 | (宇宙航空研究開発機構 技術参与、東京理科大学副学長) |
| 山田 邦子 | (タレント) |
| 小林 光恵 | (作家) |
| 神田 裕二 | (厚生労働省医政局長) |
| 飯塚 浩彦 | (産経新聞社専務取締役) |
| 河合 雅司 | (産経新聞社論説委員) |

他日医役員

【表彰式・レセプション】

平成29年2月10日（金）帝国ホテル 東京

表 彰 式：午後5時～ 本館2階「孔雀の間 西」

レセプション：午後6時～ 本館2階「孔雀の間 南」

第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」受賞者

■秋田県医師会推薦 しもだ てるかず
下田 輝一 医師 73歳 山内診療所院長



無医村の診療所への勤務を希望し赴任、以来 27 年にわたり地区唯一の医師として山村の住民の健康を保持。旧山内村には公共交通機関がないため、本院から 12 キロ山奥にも診療所を構え週 1 回診療を行う他、父親の代より引き継がれた診療所も含め 3 カ所の診療所を守る。往診も行っており、看護師・介護士・ケアマネジャーと共に患者さんや家族の相談に応じ、何かあれば、昼夜を問わず駆けつける。村民を愛し、村民から愛される地域医療に魂を注ぐ医師。

■茨城県医師会推薦 おおもり ひでとし
大森 英俊 医師 62歳 大森医院院長



祖父の代からの無床診療所を継承したが、公共交通機関が乏しく具合が悪くなるほど医療機関にかかりにくいことから在宅医療のできる環境を整備。また、診療所を有床化し患者のニーズに臨機応変に対応している。小さな集落には巡回診療も行う他、老人ホームやグループホームも運営する等、高齢者が一人きりにならないような環境作りに尽力。年間 30 人程の医学生を泊まり込みで研修生として受け入れ、過疎地域の医療の現実に触れる機会を提供している。

■神奈川県医師会推薦 あかし つねひろ
明石 恒浩 医師 63歳 ザ・ブラフ・メディカル&デンタル・クリニック院長



医療費や言葉のハードルにより受診が難しいアジア周辺や欧米人など在住外国人に英語やタガログ語等、多言語を駆使して丁寧に対応し、地域住民も含め、信頼と安心を与えている。横浜市中区は外国人労働者も多く、病状に関係なく同クリニックに救急搬送されることもよくあったという。病気や予防接種だけでなく、時に、時間外でも患者からの医療相談メールに応えるなど、医療機関の枠を超えた支援を行っている。

■京都府医師会推薦 おおもり こうじ
大森 浩二 医師 60歳 大森医院院長



投薬に頼らず食事などでの改善を基本方針に、患者や家族と十分な対話を行い、家族全員の健康を預かる地域のかかりつけ医として親しまれている。医療環境が充実している都市部にあっても、独居高齢者など医療から取りこぼされている患者の「生き方」の選択を支える在宅医療に取り組む他、多岐にわたる相談に応じるため「日本プライマリ・ケア学会指導医」の資格を取得。「慈父」のように患者や家族に寄り添う医療を模索し続けている。

■鹿児島県医師会推薦 せとうえ けんじろう
瀬戸上 健二郎 医師 75歳 薩摩川内市下甕手打診療所前所長



医療応需体制が未整備の離島に赴任後、35 年にわたり、離島・へき地医療の充実と向上に尽力。船便での往来しかできない環境にあつて救急医療体制を整備、更に本土と遜色なく医療が受けられるよう、がん手術や人工透析も行える体制を整えた取り組みは全国から評価され、見学者が多数訪問。全国各地から医学生や臨床研修医も受け入れ、人材育成にも貢献している。75 歳の高齢ながら、現在も日夜診療に従事し、島民から絶大な信頼を得ている。